

随泉寺寺報

平成26年(2014年)6月号 第526号

TEL 082-892-0217 <http://www.zuisenji.com>

浄土真宗本願寺派 高峯山随泉寺

前期門信徒講座

講師 法性寺住職 高都持正文師

講題 『ありがとうございます。』

■「おもふ、」という日本語があります。

人は誰でも「おもふ」という言葉を使いますが、この言葉は多義的概念であって、判っているようで解らない言葉だったりします。

日本語は同音異義語が多いので、「おもふ」という言葉の意味の把握がやっかいです。漢字語では、意、惟、謂、憶、懐、顧、思、想、念という区があるのですが、日本語ではこれらを含めて「思ふ」という言葉に集約するのでしょうか。さて、「我思う、ゆえに我あり」というデカルトの言葉に、外部世界の現象は、わたしの描く妄想であり、私の感じる「おもふ」という直感だけがわたしであると思っているものです。

御開山親鸞聖人は、聞思莫遅慮（聞思して遅慮することなかれ）と仰せですが、この思という言葉に万感の思いを込めておられるのです。

「思う」は{分 智}としての倫理的思索でも合理的思考でもありません。それは「ねがい」であり「憂い」であり「恋い慕うこと いくしむこと」であり、
<来し方・行末>をめぐる追憶と予見・想像を表す言葉です。

言葉を越えた世界から言葉になって届く、ことばです。

6月の法座予定

- 6月 2日 本部役員会
- 6月 8日 掃除 出口・宮原
- 6月15日朝席午前10時より お父さんの集い おとき
- 6月15日昼席午後1時より 門信徒講座
- 7月 2日午後5時より 門信徒会本部役員会

☆ 初参式

5月15日随泉寺の初参式が行われました。今年は山田 璃々乃(やまだ りりの)さん、浮田 大馳(うきた だいち)くん、鎌田 晃樹(かまだ こうき)くん、宗川 桔子(むねかわ きこ)さんの4人の方の初参式が行われました。



浄土真宗の門信徒のご家庭に生まれた赤ちゃんが 初めてお寺にお参りする「初参式」は、尊いご縁によって恵まれた、新しいのちを 阿弥陀如来さまの御前にて、ご家族、また縁ある方々そろってお祝いし、感謝する式です。

元気で育ってくださることを願います。

☆ おとうさんの集い 6月15日午前10時～

1月から3月までの自殺者が8500人だそうです。それも40代から60代までの働き盛りのお父さんが多いようです。

なぜ男の人のそれも働き盛りの人が多いのでしょうか。原因は色々言われていますが、結局は本当の拠り所を持っていないということなのでしょう。家族の中で一番中心だと思っているお父さんは誰にも頼ることが出来ず、独り悩んでそして、.....

今こそ私を支えてくれる確かなものに出会うときです。そのために仏様がおられます。

ぜひともお父さんの集いに参加してください。



☆インド紀行 若院 鎌田智也

2月26日から3月8日までの12日の間、私は仏教の聖地であるインドへと仏蹟参拝への研修旅行に行かせていただきました。



私自身インドという国へは2回目の旅行でありました。前回に行かせていただいたのは10年程前のことでした。もう一度インドへ行ったことがあったこともあり、この度の旅行は参加するかどうか悩んだのですが、10年の年を重ねて自分自身が前回の旅行の時と比べてどのような感じ方をするのか、という興味もありインドへと研修旅行に参加することにいたしました。

今回のインド仏蹟旅行は釈迦の八大聖地と言われる内の七つの聖地と言われる、ルンビニ(誕生の地)、ブダガヤ(成道、悟りを開いた地)、サールナート(初転法輪の地)、ラジギール(霊鷲山や竹林精舎など釈尊が布教のために滞在された地)、サラバスティ(祇園精舎や舎衛国など釈尊が良く滞在し説法された地)、バイシャリ、(涅槃の前に最後に立ち寄った町)、クシナガラ(涅槃の地)を旅させていただきました。

何回かに分けてこの度のインド仏蹟巡拝の感じたところを旅行記と共に伝えしていきたいと思っております。



☆浄土真宗本願寺派門主大谷光真著 「「あけぼのすぎ」

— 浄土真宗一口法話 —6月

「仏法に明日ということはない

今日の尊さ 今日のアリガタさ」(曾我 深)

世代の断絶、若い人の気持ちが変わらないとはよく耳にし、口にする言葉です。仏教についても、聞く人の年齢によって受け取り方が変わるの自然でありましょう。私は、五〇歳を過ぎてから、学生時代の恩師や、先輩、後輩、そして、身内に次々とおれをしました。お浄土がより親しく感じられるようになり、さらに、私は、何をなすべきか、今までと違った見方をするようになりました。

これは、二〇歳くらいの青年には じにくいことでしょう。これから先に、長い人生が広がっていると感じられるはず。今の自分とは違った本当の自分を探している人が多いとも聞きます。

しかし、年齢が違って、今日の一、今の一時が二度と無いことは同じです。 限りあるいのちを生きていることも同じです。

今日いのちが終わっても 何十年先まで続いても、この一時は同じように大切であることを阿弥陀如来さまは教えて下さいました。南無阿弥陀仏とお念仏申すとき、恵まれたいのちの尊さが味わわれ、共に歩むことの大切さが思い起こされます。

6月 カレンダー法話 東井義雄師

【思っているつもりでいたら 思われていた私】

秋晴れの空に柿の実が色づき、夕焼け色に輝きはじめると、毎年、思い出す子があります。それは、芳子ちゃんという女の子です。

芳子ちゃんの家には、大きな柿の木がありました。「善左衛門」という種類の甘柿の木でした。「善左衛門」は、ずいぶん大きな木になる性質の柿で、屋根むねよりずっと高く伸びます。実の甘味が強いので、子どものおやつとなる木として、たいていどの家にも植えてありまし・た。

でも「善左衛門」の一番おいしいのは、何ととっても、屋根むねよりも高い木のてっぺんの方で、しつかりお日さまの光を浴びた柿で、その味は格 でした。それらが夕焼け色になるころになると、しつかり充実して、頭の方の皮が破れてひび割れます。ひび割れたところをお日さまがしつかり照らされるので、ちょうど、黒糸を何重にも巻きつけて鉢巻きをしているように見えるようになります。見事な鉢巻きをしているも

のほど、その味が抜群なのでした。

芳子ちゃんの家「善左衛門」も、てっぺんの方には、そういう鉢巻きをしたのがいくつもありました。その中に、ひときわ大きく、ひときわ見事なのがありました。色も見事、形も見事、鉢巻きもひときわ見事でした。

芳子ちゃんは、毎日、学校から帰ると、はしごをさしかけて木に登り、柿をとっておやつにしていました。でも、その一番見事なのは残してきました。あれが、おばあちゃんの歯にあうようになったらおばあちゃんにあげよう、あれは「おばあちゃんの柿」だと考えてきたのです。

その「おばあちゃんの柿」が、いよいよ美しく輝きはじめました。もうあれだったら、おばあちゃんの歯にもあいます。

学校から帰ってきた芳子ちゃんは、はしごを柿の木にさしかけました。先を割って柿をはさみとれるようにした長い竹ざおを柿の木に立てかけました。そしてはしごを登っていきました。一番上の段まで上ると、竹ざおを「おばあちゃんの柿」の方へ突き出しました。さおが届きません。もっと短いさおでも届くように見えたのに、届きません。はしごよりもうひとつ上の枝に上がりました。すこし木がゆれます。さおを突き出してみました。日本晴の空がチカチカまぶしくて、どうもうまくいきません。何とか・・・と苦心しているときでした。

「芳子、おちんようにしておくれよ」それは、芳子ちゃんの大好きなおばあちゃんの声でした。手を休めて下を見ると、はるか下で、おばあちゃんが、心配そうに、芳子ちゃんを見上げていてくださっているのです。

翌日、芳子ちゃんが私に見せてくれた日記には、その日のことがくわしく書いてあり「おばあちゃんのことを、一生けんめい思っあけていっているつもりでいたら、いつの間にか、おばあちゃんの方から思われてしまっていました」ということばで結ばれていました。「思っあけていっているつもりでいたら、いつの間にか、思われてしまっていた」・・・。こんなところに、私に日記で訴えずにおれないほどのよろこび、しあわせを感じとられる芳子ちゃんの心の豊かさが、私の心をゆさぶるのでした。

☆ 朝と晩とに忘れずに

朝と晩とに忘れずに

そしてそのとき思ふのよ

忘れてゐても、仏さま

だから、私はさういふの

私もおれいをあげるのよ。

いちんち 忘れてゐたことを。

いつもみてゐてくださるの。

「ありがと、ありがと仏さま。」

金子みすゞ

「はずむいま」

